

聖書:レビ記25章8~17節

私が子どもの頃のことですが、祖父が紋付き羽織袴をはいて正装し、神棚に向かってお供えをして礼拝していた姿を覚えています。いまは、こんなことをする家はほとんどないかもしれませんが、今日も北海道神宮に参拝する人たちが列をなしていますので、正月が特別な時間であることは変わりません。

では私たちクリスチャンにとってはどうなのか。聖書には正月のことはほとんど書かれていない。ですから正月は意味がないのか。あるいは、また一つ年をとってしまったとってがっかりすることなのか。レビ記から、クリスチャンにとって新しい年を迎えるとはどのような意味なのかを見ていきます。

8節。「あなたは安息の年を七回、すなわち、七年の七倍を数える。安息の年が七回で四十九年である。」ここに安息の年というのが出てきます。このことについては、4節に説明があります。六年間は畑に種を蒔いて収穫するのですが、七年目は安息の年となって畑に種を蒔いてはいけません。そのような決まりです。畑で野菜を作ったことのある方はよくご存じでしょうが、同じ所に同じ品種の種を繰り返して蒔くと、「連作障害」といって病気が発生し易くなったり、作物が育たなくなるので畑を休ませる必要があります。そういう知識が聖書の古い時代からすでにあって、それで七年ごとに安息の年とする。そしてそれを七回繰り返すので、四十九年数えなさい。

続いて9から11節の最初の所まで読みます。「あなたはその第七の月の十日に角笛を鳴り響かせる。宥めの日に、あなたがたの全土に角笛を鳴り響かせる。あなたがたは五十年目を聖別し、国中のすべての住民に解放を宣言する。これはあなたがたのヨベルの年である。あなたがたはそれぞれ自分の所有地に帰り、それぞれ自分の家族のもとに帰る。この五十年目はあなたがたのヨベルの年である。」

「その第七の月」とは翌年の五十年目の第七月のことで、毎年七月十日は宥めの日とすることはあらかじめ決められていました。その日に角笛を吹き鳴らして、ヨベルの年であることを国中に告げなさいと言うのです。

どうしてわざわざ角笛を吹き鳴らして知らせなければならぬのか。いったいその年には何が行わ

れるのか。そもそもどうして宥めの日に角笛を吹き鳴らすのか。いろいろ疑問があります。

まず宥めの日について。このことは17章11節に出ていて、ほふられた動物の血を祭壇に振りかけることで人の罪が聖められていく。なぜなら血によってしか人の罪は聖められないから。それが宥めの日で、ヨベルの年にはその日に角笛を吹き鳴らします。

そのようにして全土に告げられるヨベルの年に何が行われるのか。いろいろありますが、二つだけ取り上げます。一つ目は土地のことです。日本では、いったい土地を誰かに売り渡してしまえば、買い戻さない限り元の持ち主に戻すことは永遠にありません。ところが聖書の世界はまったく違う。以前誰かに土地を売ったとしても、ヨベルの年にはその土地は元の所有者にただで戻ってくる。こんなことをしたら、土地を買った人は損するだけではないか。ちゃんと書いてある。土地の値段は何で決まるか。ヨベルの年までに何回収穫できるのか。その回数で価値が決まる。これを読んで驚く方がたくさんいるでしょう。私たちの経済感覚とまったく違うからです。どうしてこんな考え方をするのか。理由は簡単です。土地はだれのものであるのか。日本であれば、土地の所有権は個人あるいは法人に属していると考えます。また土地の価値は、都会の真ん中と田舎の原野ではまったく違う。需要と供給で決まるようになっている。ところが聖書では、土地を所有しているのは人ではなくて、あくまでも神ご自身が所有される。創世記を見ればおわかりのように、神がこの世界を造り、土地や畑を創造したのですから当然といえば当然。聖書の世界が当たり前で、私たちの現実の方が本来はおかしいのです。とにかくヨベルの年には、土地が元の所有者にただで戻ってくる。これが一つ目です。

次に二つ目。10節後半にあります。「あなたがたはそれぞれ自分の所有地に帰り、それぞれ自分の家族のもとに帰る。」旧約の時代、家が貧しくて奴隷として売られるということがあったそうです。別に聖書の世界だけではない、日本でもかつてそういうことが行われていて、借金を返すまでは死ぬまで働かせられた。無条件で家に帰るなど絶対にあり得ませんでした。しかし聖書は違う。ヨベルの年には無条件で解放されて自分の家族のもとに帰ることができる。これが二つ目のことです。

では実際にヨベルの年は実施されたのか。学者が調べても、行われた様子はなかったそうです。現代のユダヤ教でも行われていないと聞きます。それだけ難しかったということなのでしょう。では神は、私たちができそうもないことをなぜやれと言われたのか。

イエスはあるとき会堂に入られて、イザヤの書を開きこのように言われました。ルカの福音書4章18, 19節。「主の霊がわたしの上にある。貧しい人に良い知らせを伝えるため、主はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、目の見えない人には目の開かれることを告げ、虐げられている人を自由の身とし、主の恵みの年を告げるために。」

「主の恵みの年」とは、このヨベルの年のことです。まるで宥めの日に角笛を吹き鳴らすようにして、主はこのことを宣言してくださった。その日、人は失ったものをただで取り戻し、奴隷の身分から解放されて自由となって家族のもとに帰ることができる。主ご自身が本当のヨベルの年となってくださった。レビ記で語られたことは、絵に描いた餅ではなかったのです。主ご自身がご自身の血を流され、人の罪の宥めとなられて、救いを成し遂げてくださることだったのです。

ヨベルの年は実際に行われなかったかも知れませんが、聖書を読んだとき旧約時代の人々は、新しい年を迎えるたびにあとヨベルの年まであと何年残っているのかを数えたことでしょう。それと同じように、私たちも新しい年を迎えるたびに、主が成し遂げてくださる本当のヨベルの年を待ち望みます。こうして今日新しい一年を迎えたということは、もう一步本当の解放の日が近づいたことになる。だから私たちは新年をお祝いします。